

ヨハネス・ローマン

西洋人と言語の関係（言述における意識と無意識的形式） 〔二〕

阿部ふく子・渡邊京一郎 訳

Johannes Lohmann

Das Verhältnis des Abendländischen Menschen zur Sprache  
(Bewusstsein und unbewusste Form der Rede)

1952

Übersetzt von  
Fukuko ABE  
Kyoichiro WATANABE

Lexis: Studien zur Sprachphilosophie, Sprachgeschichte  
und Begriffsforschung,  
Bd. III, 1,  
unter Mitwirkung von  
Walter Bröcker, Franz Dornseiff, Ernest Lewy,  
herausgegeben von Johannes Lohmann,  
Verlag von Moritz  
Schauenburg, Lahr i. B. 1952, S.16-22.

## 凡例

- 一、本稿は Johannes Lohmann, *Das Verhältnis des Abendländischen Menschen zur Sprache (Bewusstsein und unbewusste Form der Rede)*, 1952 の翻訳 (一六—二二頁までの部分訳) である。続編は次号に掲載する予定である。
- 一、訳出にあたって底本としたのは次のものである。Johannes Lohmann, *Das Verhältnis des Abendländischen Menschen zur Sprache (Bewusstsein und unbewusste Form der Rede)*, In: *Lexis: Studien zur Sprachphilosophie, Sprachgeschichte und Begriffsforschung*, Bd. III, 1, unter Mitwirkung von Walter Bröcker, Franz Dornseiff, Ernest Lewy, herausgegeben von Johannes Lohmann, Verlag von Moritz Schauenburg, Lahr i. B. 1952.
- 一、Michel Legrand-Jacques Schotte の仏訳版を適宜参照した。Johannes Lohmann, «Le rapport de l'homme occidental au langage (Conscience et forme inconsciente du discours)», traduit de l'allemand par Michel Legrand, Jacques Schotte, In: *Revue Philosophique de Louvain*, Quatrième série, tome 72, no. 16, 1974, pp. 721-766.
- 一、( ) は原著者による補足説明である。
- 一、〔 〕 は訳者によるものであり、主に原語の併記、ドイツ語以外で書かれた語句の訳の表記、その他の補足説明のためを用いた。
- 一、【 】内のアラビア数字は、底本の頁数を表す。
- 一、傍点は原文のゲシユ・ベルトに対応する。
- 一、註番号について、原註を ( ) とアラビア数字で、訳註を [ ] と漢数字で表記した。

ギリシアの思考にそなわる根源的な形式をごく単純化して原理的に規定し、その特色を際立たせることができる  
とすれば、それはおそらく、この形式において自我が積極的な要素としては完全に度外視されていること、またこ  
の点でギリシアの形式は近代主観主義と絶対的な対極をなすということである。積極的な要素としての自我は、人  
間の行為を思想の図式に当てはめるので、秩序要素ではなく妨害要素となる。このことはギリシア語が示すところ  
である。(たとえば、認識においては、*λογος*〔言葉〕を妨害する *doxa*〔思い込み〕という妨害要素、【17】倫理学  
では、*σωφροσύνη*〔節制〕に対する *ἀνπαύτεια* や *ἀκρασία*、つまり「自制心のなさ」という妨害要素となる。)以上  
から明らかな通り、ギリシアの根源的な思考形式には、(思考する・認識するという「主観的な」形式である)「判  
断」形式も、(人間的に行為し努力するという、自我が定める形式である)「意志」の概念も見つけようがないので  
ある！すでに『レクシス』第II巻二一四、二一八、二二五、二三〇頁で詳述したように(一)、このことが完全に一貫  
したかたちで言えるのは、ギリシアの根源的な言語形式と思考形式だけであつて、これらの形式は歴史の時間の流  
れのなかで目まぐるしく変化する。そして、細部まで矛盾なくつくり込まれた新しい形式がラテン語のうちに見出  
される。ラテン語に抱くこうしたイメージはもしかすると後期ギリシア語や古代ギリシア語に関する私たちの不完  
全な知識にもとづいているだけで、対象そのものから出てくるものではないかもしれない。だが、その点はさしあ  
たりここでは未決定のままとしておこう。いずれにせよ、根本から変化した思考形式というものをラテン語から導  
き出すことは容易にしかも十分確実かつ明晰なかたちで可能である——その形式というのをもまた、ギリシアの根源  
的な形式と同じく、まったく明確で首尾一貫した諸原理にもとづいているように思われるかもしれない。ところが、  
これら諸原理はギリシアの世界観がよって立つ諸原理とは正反対のものだ。

「判断」という思考原理は、ラテン語の *cogitare*、つまり「思考」という概念のうちにきわめて明晰に表現され

ている。この語源については、マルクス・テレンティウス・ウァロがすでに書き留めている (*cogitare a cogendo dictum* [訳: *cogitare* は *cogere* に由来すると言われる]、『ラテン語論』第六卷四三節) [1]。そしてその後、アウグスティヌスが『告白』第十卷(第十一章一八節)の記憶に関する有名な考察のなかで、認識論的な面から見事な解釈と描写をおこなっている。 *quocirca inuenimus nihil esse aliud discere ... nisi ea, quae passim atque indispotite memoria continebat, cogitando quasi colligere ... quae si ... recolere desitero, ita rursus demerguntur ... , ut demo velut nova excogitanda sint ... et cogenda rursus, ut scri possint, id est velut ex quadam dispersione colligenda, unde dictum est cogitare. nam cogo et cogito sic est, ut ago et agito, facio et factio. verum tamen sibi animus hoc verbum proprie vindicavit, ut non quod alibi, sed quod in animo colligitur, id est cogitur, cogitari proprie iam dicitur. [訳: それゆえ学(ぶ)ことは「……」記憶のうちに無秩序に乱雑に含まれていたものを思考によって寄せ集めることにはかならない、ということが明らかになる。「……」これらのものはふたたび埋められ「……」あたかも新しいもののように、あらためて考え出さねばならなくなる。「……」そして知られるためには、ふたたび集められなければならない。すなわち、いわば散乱の状態から寄せ集められねばならない。これが「考える cogitare」≡「思考によってふたたび集める」といわれるゆえんである。「集める cogo」と「考える cogito」との関係は、「動かす ago」と「騒がす agito」との、「なす facio」と「営む factio」との関係と同じだからである。それにもかかわらず、心はこの「考える」という言葉をまったくわがものにしてしまったのである。それでほかのところにおいてではなく、心において寄せ集められる、すなわち「思考によって集められる」もののみが、本来的な意味においても、「考えられる」と言われるのである。[三]「集める」というイメージは、ここでは「in animo colligere」(心の中で寄せ集めること)を意味しているのに対し、ギリシア語のほうでは言述という「発話(Sagen)」*

を表すものとして用いられる (*λέγω* 「発話する」や *λόγος* 「ロゴス、言述」も元々「集める」を意味する)。これはきわめて特徴的なことである。この違いはラテン語において「思考」が言述との直接的な結びつきから離れて、「思考する者」の思いどおりになってしまったことを示す外的な徴表である。【18】もっともその際、すでに見たように、言語との結びつきが解消されているわけではないのだが。——この段階で言う「思考する者」とは、厳密に言えば「論証する者」のことであって、そもそも「判断する者」ですらない（というのも、「思考する者」が次第に「判断する者」へと展開していくのは、中世の唯名論を待たねばならないからである。先に見たように【9】頁以下、唯名論では、論拠の発見 [*inventio*] がもの [*res*] の把握 [*apprehensio*] に置き換えられた。それにともない、判断行為の領域は言語から表象された事物へと、つまり中世とその後の方カルトで言う *res obiectiva* 「客観的なもの」へと及んでいったのである）。

それに対して倫理的な領域での変化は、はじめから根本的なものであり、ラテン語由来の西欧語で言う意志 [*Wille*] という概念を指す新語に表れている（『レクシス』第Ⅱ巻二二二頁以下）。このことは、古典古代の「最善」 [*Optimum*] という客観的な理想が、ヘレニズム時代になると、完全な人 [*vollkommener Mann*] という人格的な理想に変化していることから最終的に結論づけられた（前掲書二二三頁以下）。それにより、認識よりも意欲すること [*Wollen*]（とりわけ *bona voluntas* 「善意志」）に優位が与えられ、この優位が西欧のキリスト教においても維持されるとともに、その先もさらに強固なものとなっていくのである。このことは、とりわけアウグスティヌスに見取れる。自我はいまや、善を捉えそこなうときでも、いやむしろ捉えそこなうときにこそ、何よりもまず、意欲する自我である。（アウグスティヌス『告白』第七卷三章五節： *itaque cum aliquid vellem aut nollem, non alium quam me velle ac nolle certissimus eram, et tibi esse causam peccati mei iam itaque animadvertbam* [訳：

それゆえ、私が何かを欲したり、欲しなかったりするとき、他人ではなく私自身が欲し、あるいは欲しないのであるということをも、私はこのうえなく確実に認識していた。そしてそこに自分の罪の原因があるということがだんだんとわかってきた。<sup>〔四〕</sup>カントの言う「自由からの因果性 [Kausalität aus Freiheit]」という概念のもとで考えられているように、意志決定がもつ根源性と原理的な無条件性は、結局のところ、意志に関係する一群のラテン語動詞 (*wille* [欲する] / *nolle* [欲しない] / *mallo* [〜よりも欲する]) に、すでに実践的なかたちで表現されていたのである。

ギリシア語にはそもそも意志という概念は存在しないのだが、このことは今までしかるべきかたちで考慮されてこなかった。それにともない、「因果性 [Kausalität]」や「究極性 [Finalität]」(原因や目的など) の概念について考える際にもつねづね見過ごされてきたことがある。それは、これらのイメージが、それ自体で与えられている確固としたものではなく、むしろこの領域がそのつど支配的な思考形式にに応じてまったく異なる概念で表現されているのだということである。以前詳しく述べた通り (『レクシス』第Ⅱ巻二一九頁)、何が存在するのか (*τί ἐστιν*?) (訳: 何が原因なのか) —— アリストテレスが原因を考えるのはまさにこの次元である —— に対する「応答」としての原因性 [Ursächlichkeit] という概念は、ヘレニズム時代では「原因」と「結果」(*causa* と *effectus*) の連続というイメージに変わっている。ところが「*causa finalis* [目的因]」という後の時代のイメージは、アリストテレスの方では (*τέλος* [目的] という) まったく異なる特徴をもっていたのである。『ニコマコス倫理学』にもあるように、アリストテレスの考える目的とはそもそも、<sup>〔19〕</sup>ある行為をする際に意図として思い浮かべる目的のことではまったくない。そうではなく、これは知性的に見れば事柄が行き着く先にある最終状態であり、行為に關して言えば、善いもの、すなわち *εὐαδία* の客観的な序列における最終地点のことなのである。(『ニコマコス倫理学』

1094a 18 : τῆλος ἐστὶ τὸν πρακτῶν ὁ δὲ αὐτὸ βουλούμεθα, τὰ δ' ἄλλα διὰ τούτο, καὶ μὴ πάντα δι' ἕτερον αἰτιούμεθα – πρὸς αὐτὸν γὰρ οὗτο γ' εἰς ἄνεργον, ὅστ' εἶναι κενὴν καὶ ματαίαν τὴν ὁρεξίν) [訳：私たちの行為しうる事柄のうちには、それ自体のために望む目的が何かあつて、そのためにそれ以外の事柄を私たちが選り取り、しかもそれとは異なるもののためにすべてのものを選び取るわけではない——なぜなら、こうした仕方であつてゆけば、それは果てしなく進んで、欲求は空しく甲斐なきものとならうから。〔五〕こうした自分自身のうちで静止している究極性とは違つて、カントは対極の観点を定式化する。「私たちは合目的性を、(……) 私たちが自然的諸事物ならびに総じて世界をある悟性的原因の産物 (B版・C版：神なるものの産物) として表象することによる以外には、決して考えたり把握したりすることができない」(『判断力批判』第七五節〔六〕)。

以上のようなカントとアリストテレスの思考様式の違いは、意志概念の有無に直接関わっている。意志の因果性(カントの言う「自由からの因果性」)は典型的に、ある原因からある結果が生じるのを見るときにイメージされる因果性である〔一〕。ただし、ここで言う目的や意図とは具体的な意志のことであつて、意志の概念を欠いているので、「究極性」という言葉もまた必然的に別物として考えなければならぬ。たしかに私たちは、自分がすでに知っているイメージに大体対応するものを見出すのがつねである。だが、より正確に見てみると、同じ特徴をもつた違いが繰り返されているにすぎないのである。たとえばギリシア語の σκοπός (目的、意図) は、一見すると、概念上の根本的なイメージでは、ドイツ語の「意図」[Absicht]と限りなく似ている。しかしここでプラトンの一節を読んでみよう(『ゴルギアス』507D)。οὗτος εἰποιε δεκεῖ ὁ σκοπός εἶναι, πρὸς ὃν βλέποντα δεῖ εἶναι [訳：これこそ、ひとが人生を生きる上において、目を向けていなければならぬ目標であると、ほくには思われるのだ。〔七〕]ここに見て取れるように、この σκοπός というギリシア語は、客観的に存在すると考えられる「目的」、行為者の外から与



えられる「目的」、眼の前にある「目的」のものを表しており、その「目的」に向かって【20】態度決定がなされるのである。他方、ドイツ語の「意図 [Absicht]」という語（グリムの辞典によれば、この語は「一八世紀に初めて登場し、それ以前にあった予測する [Abschauen] という語の代わりに出てきた」<sup>〔八〕</sup>）には、ラテン語の *intentio*（意図）という語がもつ完全な主観性のニュアンスが込められることになった。——つまり *intentio* は、概念それ自体として見れば、とりわけストア派で言うギリシア語の *ἔσις*（調子）に由来し、ヘレニズム初期から近代に至るまで連綿と続いたヨーロッパ的な自我中心の思考の展開過程を取り込み、反映している。そしてこの概念は、その後もさらに一九世紀および二十世紀初めの反省哲学になると、（中世ならば）この *intentio* と同じ概念は *prima intentio*（第一志向）、*secunda intentio*（第二志向）という重大な役割を担っていたところ、それが時流に適った仕方で復権されて（哲学的な思考にとってまったく新しい領域を開拓することになったのである（『レクシス』第一卷一一一—一一五頁を参照）。

行為や態度の主観的な目的である「意図」には、主観的な根拠すなわち「動機 [Motiv]」が関係してくる。ここでもギリシア語は私たちの慣習や期待とはまったく違った表現をする。私たちなら当然のように、ここには解釈者たちをたびたび弄んできた「概念の隠し絵 [Begriffs-Verbild]」の挑発があつて、表面的な見方をしているうちはまだ覆い隠されている何かがあると思つてしまふものだが。ラテン語の *causa* と *praetextus*（すなわち「原因 [Grund]」と「口実 [Vorwand]」）と、ギリシア語の *αἰτία*（原因）と *πρόφασις*（口実）は、一見相互に対応するように思われる。けれども、この用法は必ずしも正しいとは言えない。とりわけ私たちが「困惑させる [veräxtern]」のは、トゥキユデイデスの有名な箇所（第一卷二三章）である。そこでは、原因と口実という二つの概念の関係が、ちょうど真逆になっているように見える。この箇所では、ペロポネソス戦争が起きた実際の一

番深い原因が、ふつうに考えれば本来「口実」を意味するべき語で指し示されていて (ἡ ἀληθεύτη πρόφασις [包み隠さぬ口実]。第六卷六章に出てくるシケリア遠征の原因も同様の表現)、口実にされたさまざまな理由づけの方向が、*ai λειπόμενα αἰτίαι* (体裁の良い原因) と呼ばれているのだ。それに反して、別の箇所はさしあたり、ラテン語にしたときの解釈者たちの先入観の通りになっているように思われる (たとえば、第六卷三三章におけるアテナイ人のシケリア遠征では次の通り。Aθηναίων γὰρ ἐφ' οὐδίας … ὄφρηνται … πρόσφατον μὲν Ἐγερτάσιον ἑπιμαχίᾳ καὶ Δεοντίων κατακταῖ, τὸ δὲ ἀληθὲς Δικελίας ἐπιθυμίᾳ [訳: アテナイ人は諸君を攻略するために「……」エゲスタとの盟約とレオンテイノイの再建を遠征の口実に挙げているが、実際はシケリア島、なかでも私たちの都市を征服しようと思われている] (九)。あるいは、少なくともそうした先入観に明らかに矛盾するわけではないように思われる (第三卷八二章一節: ギリシア全土が紛争に包まれることになったのは、さまざまな都市の民衆派がアテナイ軍に、寡頭派がスパルタ軍に援軍を求めたためである。これは戦争がもたらしたひとつの結果である。というのも、*ἐν μὲν εἰρήνῃ οὐκ ἄν ἐξόντων πρόσφατον οὐδ' ἐτοιμῶν παρακαλεῖν αὐτοὺς* … [訳: 平和の時代には両派とも外国勢力の干渉を招く口実も用意もなかったであろう。[10]——ということと、平和であれば、彼らには何の動機も理由づけもなかったからである。]。そうすると、たとえば [21] エルンスト・カップのような明敏な解釈者の場合、まさに「さまざまな意義」を「巧みに操る」ことができるわけだ (『グノーモン』第六卷、一九三〇年、九八頁 (一一))。[カップはトゥキユディデスについての論文で次のように述べる。]

とりわけ (先に引用した) 第六卷三三章一二節の表現から明らかになることとして、*ἀληθεύτην πρόφασιν* [包み隠さぬ口実] という語結合において問題になるのは、対照法の場合では本来別の側に属する *πρόφασις* [口実]

という語が、(πρόφασιςとはすなわち「主張しうる原因」なのだとする)もっぱら表現の上で簡単に説明のつくり置き換えにすぎないということである。(『歴史』第一卷一三三章一節、第三卷九章二節、第三卷一三三章一節、第三卷四十章六節を参照。)また、デモステネスの第一八弁論、一五五、一五八節を参照せよ。当該箇所では、この「πρόφασις」という語が両方の側に同時にでてきているのに、このような脈絡にとつて元々の意味となる「口実」という意味はまったく失われてはいない。δὸς δὲ μοι τὴν ἐπιστολὴν … ἵν' εἰδῆτε καὶ ἐκ ταύτης σαφῶς ὅτι τὴν μὲν ἀληθῆ πρόφασιν τὸν προσωμίαν … ἀρεκρύπτειτο, κοινὰ δὲ καὶ τοῖς Ἀμφικτυοῖσι δόξαντα προσποιεῖτο· ὁ δὲ τὰς ἀφορμὰς ταύτας καὶ τὰς προφάσεις αὐτῶ παρασχὼν οὕτως ἦν … ὁρᾷ' ὅτι φεύγει μὲν τὰς ἰδίους προφάσεις, εἰς δὲ τὰς Ἀμφικτυονικὰς καταφεύγει· τίς οὖν ὁ ταῦτα συμπαρασκευάσας αὐτῶ; τίς ὁ τὰς προφάσεις ταύτας ἐνδούς; [訳：それを聞かれれば一連の行動の真の理由「……」を隠して、アンピクテュオニア神聖同盟と志を一つにして行動するかのようにピリッポスが偽装していたことを、みなさんははっきり理解されるでしょう。「……」しかしそのような動機と口実を用意してやったのは、被告だったのです。「……」ピリッポスがいかに自分個人の弁解を避けて、アンピクテュオニア神聖同盟を盾に言い逃れをしているかおわかりでしょう。ではこれらをピリッポスに用意してやったのは誰でしょう? こんな言い逃れをさせたのは誰でしょう?」(一二)。第一卷二三章六節も同じである。また、この語「πρόφασις」が元々の側にある第一卷一一八章一節、一二六章一節、一四六章一節といった一連の箇所との比較も難しくはない。(第一卷一四一章一節についてはまず最初に医学用語を想起するかもしれない。しかし第一卷二三章六節に関してこう主張することがあってはならない。すなわち、トゥキディデスは「本当の理由」[Ursache]としてあげられるべき理由に対して、イオニアの物理学や医学が学問上の因果性概念を表現するとき用いる語を使っている」(エドゥアルド・シユヴァルツ)、と。(一三)

同じ語が同時に明らかに反対のものを指している（「元々の側」にも「別の側にも出てくる」ように見えるという）こうしたパラドキシカルな現象は、次のことよってのみ説明がつく。すなわち、*prophasis*「口実」という概念は、ラテン語の *praetextum*「口実」/ *causa*「原因」という対語の場合とは元来まったく異なる観点から考えられているのだが、にもかかわらず、多くの箇所でも明らかなように、*prophasis*と *aitia*「原因」とのあいだに密接な関係がなくてはならないということである（トゥキュディデス第三卷一三章ほかも参照せよ。医学では、*prophasis*「口実」が後に *gavvra* (*εἰσόδου*) *aitia*「顕在的な（外面的な）原因」となる。カール・ダイヒグレーバー、前掲書（二四）。トゥキュディデスその他における *prophasis* の実際の意味の規定については、とりわけ三つの点に留意すべきである。

1. 語源的にはこの語は両義的である。すなわち、*phōsis*「外観、体裁、現れ」は、*phmi*「私は言う」にも *phōsis*「現れる」ないし *phōsion*「〜のように見える」にも関連しうる。2. *prophasis* は『イーリアス』にもすでに見られる。そこでもトゥキュディデスの場合と同様、実際の原因と単に口実にされた理由とのあいだでさまざまに変化するという独特の両義的な形をとる。3. *prophasis* は、【22】イオニアの医学に非常によく出てくる表現で、病気の「*Praeludium*「前兆）」として生じる現象を表すのに使われる。その際、この「前触れ」*Vorspiel*」が、有効な理由として理解されるのか、単に現象のなかで事実上先行しているだけと理解されるのかは、さしあたりここでも両義的である（二）。

(1) これについては【18】頁に挙げたアウグスティヌスの引用を参照されたい。「τι το αἴτιον? (何が原因なのか)」という問いは、何が存在するのかということから遡って、それが存在していることの「責任」を何が「負う」のかという思考へ向かう。そのため、アリストテレスが *aitia* (原因) を補足するべく折に触れて作りだした *aituron* (因果関係) すなわち「*causatum*」という概念は、後の時代にはおよそ理解不能なものとなっていると言わざるを得ない。それは、この *aituron* から派生した *aiturukh* *pturon* (影響された格) が誤訳されて「*accusativus* (告訴の)」と表されたという有名な出来事からも分かる(訳注・次の文献を参照された)。Miriam Butt, *Theories of Case*, Cambridge Textbooks in Linguistics, Cambridge University Press, 2006, p. 14)。ラテン語の動詞 *causari* (言ひ立てる、口実にする) は、*ca* (あたり)「論証する」思考(= *propositio*) (本意と想わせる、口実にする) *Dositheus* 59, 8 K. (*Grammatici Latini* 四三〇頁) を表すのだが、古代後期においては中世になるとロマンス諸語に適合し、*causare* (生じる、起る) という語が台頭してきて、産出する因果性という概念が徐々にできあがってきたのである。この語はまた、思考形式の変化を示すひとつの重要な徴表なのだが、こうした広範な探究はとりわけ中世思想史の分野で要求されるものであるから、今ここではこれ以上たどることはできない。

(2) トウキユデイデスの場合でも、*propositio* (口実) は医学的な文脈のなかで出てくる。第二卷四九章では、アテネでペストが流行したときのことと記されている。そこで彼が述べるには、当時は他の疾病がみないこのペストという疫病へと「行き着いた [umschlugen]」。彼は次のように続ける。τοῦς δὲ ἄλλοις αἰ

οὐδεμιᾶς προφάσεως, ἀλλ' ἐξαιτίας ὕλης ὄντας ... ἐλάμβανε 「健康だったその他の人びとは、何の πρόφασις [「前触れ」] もなく突如として襲われた」——ここで、何も知らない読者はきくと、「何の原因 [Grund] もなく」という意味だとさしあたり理解するだろう。しかし、通常の医学的な用法に従うなら、この表現は (そもそもの病気を引き起こすような) 何らかの「病気の前兆 [Vorkrankheit]」なしに」という意味以外にまず理解できない。トゥキユデイドスの態度に特徴的なこととして、彼はペストの「原因 [Ursache]」(aitia) についての言及を他の者たちに委ねたいとする (第二巻四八章三節) 一方で、「現象」の方をきわめて精緻に記述することに自らの野心を發揮している。しかしまったく似たようなかたちで、第一巻一四六章の政治のレベルの話にも、aitia [「原因」] と πρόφασις [「口実」] が対になって出てくる。aitia のほうは「二つの国が」相互に苦情を言い合うという意味で使われている (aitia θε αὐτῶν καὶ διαφορῶν ἐγένοντο ἀμφοτέροις πρὸ τοῦ πολέμου) [「訳：開戦前に双方から出された苦情や争点であった」]。こうした苦情は、たとえ猜疑心に満ちていても、人びとがある程度まではまだ平常どおりに相互に往き来することを妨げるものではない。「条約」が失効し形骸化した結果、戦争と平和のおかしな中間状態、すなわち迫り来る戦争の「前段階」や「病気の前兆」が生じたのである (σπονδῶν γὰρ ἐγγυσις τὰ γυνόμενα ἦν καὶ πρόφασις τοῦ πολέμου) [「訳：諸事件は休戦条約の違反であり、戦争の口実となりえた」]。

(つづく)

- 〔一〕 J. Lohmann, "Vom ursprünglichen Sinn der aristotelischen Syllogistik (Der Wesenswandel der Wahrheit im griechischen Denken)", In: *Lexis : Studien zur Sprachphilosophie, Sprachgeschichte und Begriffsforschung*, Bd. II- 2, unter Mitwirkung von Walter Bröcker, Franz Dornseiff, Ernest Lewy, hrsg. v. Johannes Lohmann, Verlag von Moritz Schauenburg, Lahr i. B. 1949.
- 〔二〕 Marcus Terentius Varro, *De lingua latina libri*, VI, 43.
- 〔三〕 Sancti Augustini *Confessionum*, Libri XIII, ed. Lucas Verheijen o.s.a. *Maire de recherche au C.N.R.S.*, Turnhout, Typographi brepolis editores pontificii, memlxxxii, p.164. (アウグスティヌス『告白』山田晶訳『世界の名著14』中央公論社、一九六八年、三四四頁以下、およびアウグスティヌス『告白(下)』服部英次郎訳、岩波文庫、一九七六年、二五―二六頁参照。) 山田訳と服部訳をもとに原文に照らして翻訳した。訳語や表記の統一や文脈上の必要から、適宜表現を変更させていただいた箇所がある(以下の引用につきつめ同様)。
- 〔四〕 Augustinus, *op. cit.*, pp. 94-95. (山田訳、二二二頁、服部訳、上巻二〇六頁参照。)
- 〔五〕 Aristotelis *Ethica Nicomachea*, recognovit brevique adnotatione critica instruxit I. Bywater, Oxford: Oxford University Press, 1890, p. 2 (1094a 18). (『アリストテレス全集15ニコマコス倫理学』神崎繁訳、岩波書店、二〇一四年、一九―二〇頁参照。)
- 〔六〕 Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, hrsg. v. Heiner F. Klemme, Felix Meiner, Hamburg 2001, S.

312f. (『カント全集 9 判断力批判 (下)』牧野英二訳、六六頁参照。) ローマンが引用箇所をA 333とし  
つづめるのはA 400の誤り。

- [七] *Platonis Opera*, recognovit brevisque adnotatione critica instruxit Ioannes Burnet, tomus III, Tetralogias V-VII continens, Oxonii, E Typographeo Clarendoniano, 507 D. (『トルキアス』加来彰俊訳『プラトン全集 9 トルキアス・メノン』、岩波書店、一九七四年、一八八頁参照。)
- [八] Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Bd. 1, Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1984, S. 118.
- [九] Thukydidēs, *Geschichte des peloponnesischen Kriegs*, Griechisch und deutsch mit kritischen und erklärenden Anmerkungen, Sechstes Buch, Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1853, S. 52-53. (トマキュディデス『歴史 2』城江良和訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇三年、一三〇頁参照。)
- [一〇] Thukydidēs, *Geschichte des peloponnesischen Kriegs*, Griechisch und deutsch mit kritischen und erklärenden Anmerkungen, Erstes Buch, Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1852, S. 96-97. (トマキュディデス『歴史 1』藤縄謙三訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇〇年、三二八頁参照。)
- [一一] Ernst Kapp, "Die Geschichtsschreibung des Thukydidēs. Ein Versuch by Wolfgang Schadewaldt", In: *Gnomon*, Bd. 6, H. 2, Verlag C. H. Beck, 1930, S. 98.
- [一二] Demosthenis *Orationes*, vol. I, Orationes I-XIX, edition quarta correctior curante Friderico Blass, Aedibus b. g. Teubneri, Lipsiae 1885, p. 293-294 (KVIII 156). (テモステネス『弁論集 2』木曾明子訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇一〇年、九七頁参照。)



[ 一三 ] Eduard Schwartz, *Das Geschichtswerk des Thukydides*, Friedrich Cohen, Bonn 1919, S.250.

[ 一四 ] Karl Deichgräber, "ΠΡΟΦΑΝΙΣ: Eine terminologische Studie ", In: *Quellen und Studien zur Geschichte der Naturwissenschaften und der Medizin*, Band III, Viertes Heft, hrsg. v. Institut für Geschichte der Medizin und der Naturwissenschaften, Würzburg: Jal-reprint 1973, S. 17([225]).

阿部 ふく子 (あべ・ふくこ) / 新潟大学人文学部准教授  
渡邊 京一郎 (わたなべ・きょういちろう)

／ 東京大学大学院総合文化研究科博士前期課程